連載

新屋のアスリートたち (11)

全国高校サッカー選手権で優勝、社会人では全日本代表として ワールドカップ予選やアジア競技大会に出場した 平澤周策

平澤周策は、緑町の父・作五郎、母・チヨの5男として昭和24年3月5日に誕生した。兄4人姉2人の末子であった。

日新小の頃は、漠然と「プロ野球選手になれればいいな」と考えていたような目立たない生徒であった。

日新小6年生

ただ、秋商サッカー部で活躍した兄・雄策と敬作の影響もあり、サッカーは好きで、家には使い古したサッカーボールがあったので低学年の頃からボール遊びはしていた。

昭和36年、日新中に入学した時、濱野先生が赴任し、サッカー部が新設され、迷わず入部した。これが将来の進路が決まった瞬間で幸運と言えよう。サッカー部ができなければ、野球部に入っていたという。

同期入部で、後に高校まで一緒にプレーした高橋定雄(上表町)は「その頃からボールコントロールは抜群。ドリブルは走る速さと同じで我々とはレベルが違っていた」と語る。

同39年、秋田商高入学と同時にサッカー部に入り、内山先生と石黒監督の下、厳しい指導を受けた。この3年間のサッカー部生活が平澤の人間形成の礎となった。

1年生で出場機会を与えられた時は感激した。この年は全国高校サッカー選手権でベスト8進出。2年時は岐阜国体でベスト8に留まる。

3年生になって全国高校総体では1回戦で水戸高に抽選負けの屈辱を味わったが、大分国体では2回戦で強豪・習志野を相手によく走り、当たり、3対0で快勝。準々決勝は1対0で甲府工を振り切り、久々に全国大会ベスト4に進出した。

準決勝は難敵の浦和南に0対2で敗北。めげずに臨んだ3位決定戦は地元・大分工に延長の末引分けとなり両チーム3位。この大会でチームも平澤自身も全国大会でも十分戦えることを実感した。

3年間の総仕上げは全国高校選手権であった。雪の秋田から早く土に慣れるため愛知県刈谷市で合宿し、上々のコンディションで西宮球技場に乗り込んだ。

初戦の徳島商を延長の末2対1で下し、準々決勝は岐阜国体で負けていた明星に1対0で雪辱。準決勝は名門・浦和市立を1対0で退けた。

昭和32年度に秋商が初優勝して白河関以北に初めて優勝旗を持ち帰った時の選手に兄・敬作がおり、準決勝の相手も同じ浦和市立であったので、筆者は「縁起がいい、優勝するかもしれない」と思っていた。

ところが、相手の藤枝東は松永という好選手を擁し、全国高校総体と国体を制し、高校三冠は確実と言われた強敵中の強敵だった。

前半33分平澤が強引に左から持ち込みセンターリングしたが内山のシュートが外れ絶好の得点機を逃す。あとは防戦一方で、延長も再延長も両チームともに0が続き、両チーム優勝となった。シュート数は藤枝東の29本に対し、秋商は5本。よく凌いでくれたものだ。

優勝して表彰式に臨む

「平澤を活かせなかった」と報じた新聞もあったが、平澤は優勝した喜びよりも「負けないで良かった」としか思っていなかった。

優勝旗は、最初の半年間は秋商が保持することになり、秋田駅前に凱旋。パレード等盛大に祝福された。

活躍が認められ、主将の外山とともに日本ユースサッカー代表に選ばれ、タイに遠征した。

就職は某百貨店に内定していたが、全国大会での活躍やユース代表が評価され、日立製作所から兄・敬作を通して勧誘された。内定済の百貨店との調整もやってくれて、晴れて日立サッカー部の一員となった。

日立製作所は、昭和40年創立の日本サッカーリーグ(JSL/Jリーグの前身)で活躍しており、平澤は背番号11でデビュー。兄の敬作と一緒にプレーする夢が叶った。「走る日立」の異名で呼ばれたチームの中心選手として、同47年にはJSL1部で初優勝。同年と50年は天皇杯も獲得。同51年は第1回JSLカップ戦を制した。

天皇杯を獲得して笑顔

同45~49年は全日本代表とし国際試合に35試合出場。クアラルンプール、バンコク、テヘラン、ソウル等、海外遠征も数多く体験した。

昭和53年の引退まで、JSLでは160試合に出場し、20得点を挙げている。国際試合では35試合に出場し4得点を記録。本来はFWであったがMFもこなす器用な選手でもあった。

現在は、船橋の自宅で奥さんとお嬢さんの3人暮らし。子どもたちのサッカースクールのコーチを務めたり、地元の高齢者たちとシニアチームを結成して楽しんでいる。

(のばこやま)

西独「ケルンFC」と国際試合